

「第4回第三国定住に関する有識者会議ヒアリング」報告 2012年9月19日（於：内閣府本府5階特別会議室）

インドシナ難民の定住：強いられたい受け入れとその後の意味

小泉康一

大東文化大学

【全体的概要】

アメリカを中心とする国際社会から、インドシナ難民受け入れの強い要請。
国民の大多数は勿論、国側も「難民」とはどういう人たちか、どう処遇すべきか不鮮明。
問題はかつて経験したことのない新しい性質ゆえ、行政主導の援助活動へ。
ある意味での試行錯誤は、不可避。
“展望を描くこと”なき受け入れは、次々と問題を生じるたびにその対応策を必要とした。
（受け入れ時に欠如した「難民」という人々への認識と対応が最後まで尾をひいた。）
対策は横の繋がりを欠く個別的な対応策。
援助の現場で働く関係者は悪戦苦闘し、何よりも難民たちが大きな影響を受けた。
その一方、時の経過で細かく、洗練された独自のスタイルが生まれつつある。

【接触の変数】

（接触の目的）自己の意思に反し、強制的に祖国から押し出された
（性質）逃亡途中悲惨なめにあった
（経緯と時間）日本との歴史的な繋がりはなし
（支援）自分たちを支援してくれる同族の組織はなし
（接触の手際）受け皿としての日本社会が受け入れに際し、あわてて対応策を講じた

【留意点】

1. 行政側と難民側が相互作用し、発展させる新しい考え方の創造
2. 難民個人や集団は自分たちの生活への新しい意味とアイデンティティを生み出せる（彼らは何でもできる）
3. 問題の解決は、難民自身が何を望んでいるかを聞くこと（難民ニーズを探り出し、弱点を評価する実践的方法の開発。難民自身のカウンセラーの育成）
4. 定住の状況は無限に複雑化。人間対象の援助で費用対効果分析は危険。
5. 関係者の間での共通理解と連携。地域主導で地域資源の有効利用（資金、人材供給等）
6. 定住者の正しい映像を日本社会の人が殆ど知らない（もっと広報を強化する。教科書、学校などでの学習）
7. 難民への十分な「情報の伝達」と「提供の確保」（難民も戸惑っている）
8. 難民の生活状況に通じ、社会的に敏感さをもった研究を作業の一部として組み込む